

第 25 回 日本動物児童文学賞審査委員会の会議概要

I 日 時 平成 25 年 7 月 30 日 (月) 13 : 30 ~ 16 : 30

II 場 所 日本獣医師会会議室

III 出席者

【委員】

動物愛護・福祉部会長

木村 芳之 日本獣医師会理事 (動物福祉・愛護部会長)

動物福祉・愛護関係省庁及び教育関係省庁関係者

田邊 仁 環境省自然環境局総務課動物愛護管理室長

西辻 正副 文部科学省初等中等教育局主任視学官

動物福祉・愛護関係学識経験者

会田 保彦 日本動物愛護協会評議員

齋藤 勝 日本動物福祉協会副理事長

椎野 雅博 日本愛玩動物協会副会長

須田 沖夫 東京都家庭動物愛護協会会長

【日本獣医師会】 矢ヶ崎 忠夫 (専務理事)

IV 議 事

- 1 委員長の選任 (協議)
- 2 第 2 次審査に至るまでの審査経過等 (説明)
- 3 審査 (協議)

V 会議概要

開会に当たり、矢ヶ崎専務理事から、「本事業は日本動物保護管理協会が平成元年から実施してきた、日本獣医師会が吸収合併後も引き続き継続しており、今回で第 25 回目を迎えた。上位 3 作品を掲載する受賞作品集は、地方獣医師会を通じて、小学校や図書館等に配布している。審査委員各位におかれては、1 作品約 50 頁前後の分量を事前に読んでいただき、感謝している。本日は、大賞、優秀賞、奨励賞の 3 種類の受賞作品を協議の上、決定いただきたい。忌憚の無い意見をお願いしたい」旨挨拶が行われた。

その後、事務局から委員紹介、日本獣医師会組織体系図、部会運営規程、日本動物児童文学賞事業実施要領、第 25 回日本動物児童文学賞作品募集要項等の説明が行われた。

1 委員長の選任

委員の互選により、木村芳之委員が委員長に選任された。

2 第2次審査に至るまでの審査経過等（説明）

事務局から、平成25年1月1日から4月20日まで募集したところ、128作品の応募があり、第1次審査を現代日本少年文学の会主宰の池川禎昭氏に依頼し、第2次審査候補作品として15作品が選出された旨説明された。

3 審査（協議）

各審査委員による審査候補作品の事前審査結果をもとに、協議の結果、別紙のとおり大賞1作品、優秀賞2作品、奨励賞5作品が選定された。

4 まとめ

- (1) 別紙入賞者のうち、大賞、優秀賞受賞者の表彰は、平成25年9月23日（月・祝）東京国立博物館平成館講堂にて開催される平成25年度動物愛護週間中央行事屋内行事の会場において行う。
- (2) 大賞及び優秀賞の3作品は、「第25回日本動物児童文学賞入賞作品集」として製本のうえ、都道府県等の関係機関、小学校等の教育機関及び図書館等に配布される。

【別紙】

第25回日本動物児童文学賞入賞作品

【日本動物児童文学大賞】

「超救助犬リープ」

石黒 久人（大阪府）

＜受賞理由＞

救助犬リープと犬訓練士”担当”さんとの深い愛情が表現された心温まる物語。人と犬との信頼関係に加え、リープの視線で展開される物語も軽快で読みやすい。災害現場の描写も迫力がある。犬の性格によって、警察犬、救助犬、盲導犬、聴導犬等、役割の違う使役犬が存在すること、特に災害救助という危険と隣り合わせの中で活躍する救助犬について理解を深める作品である。

【日本動物児童文学優秀賞】

「フクシマのねこ」

本田 真貴（福島県）

＜受賞理由＞

東日本大震災を題材にしたリアリティのある作品。飼い主の少女まなと猫アイとの出会い、被災、放浪、再会まで、短いながらも丁寧に描写しており、読む人の心を打つ。特に、死んだと諦めていた猫アイと再会できると知り、涙する際、目には強さと光がよみがえり、生きる希望が生まれてくる描写はリアルであり、無事に再会できる喜びと幸せが文面から伝わってくる。

「ぼくとクウの不思議な7日間」

坂本 亜紀子（埼玉県）

＜受賞理由＞

母が入院している7日間、犬のクウが人間の言葉を話すことができ、少年いおりと気持ちに通じる面白い構成の物語。クウに勇気をもらい、様々な事に挑戦する主人公いおりの行動が読者に元気を与えてくれる。家族愛の深さ、家族の一員としてのクウの存在感がうまく表現されている。構成、展開、叙述、ともにすぐれている。親子関係の会話がすばらしく、ほのぼのとした、あたたかな作品で、心がなごむ。

【日本動物児童文学奨励賞】

「いつか見る川」

水野 春彦（千葉県）

＜受賞理由＞

それぞれの祖父や父の影響により、少年少女が夏休みの自由研究としてメダカ等の自然の生態系を壊さず維持していくやりとりが軽妙な会話で表現されている作品。外来生物について、身近な川を舞台として、身近な動物であるメダカを題材に話が展開され、自らの問題として環境、生態系、生物多様性保全の問題を考える機会を与えてくれる。

「命をありがとう」

木乃 あい（兵庫県）

＜受賞理由＞

猫のハンティングの事実を知り、自らの肉食について葛藤する主人公梨花。自然からの恵みを「いただく」ことなく生きていけないことを自らの体験を通して学んでいく姿が描かれる。少女が感情を乗り越え、「命をありがとう」と理解に至る様は微笑ましい。食物連鎖、食育について考えさせられる作品。

「鈴の音が聞こえたら」

三田 真登（埼玉県）

＜受賞理由＞

秩父の山中と夜祭りを舞台に、少年光太と犬スズの束の間の交流は面白く、鈴を首につけた犬の存在も読みごたえがある。本当の飼い主との偶然の出会い、飼い主にスズを返す際の主人公の心情がうまく描かれている作品。

「地球が住みか」

藤井 弘子（広島県）

＜受賞理由＞

外猫への餌やりの問題を上手く紹介しつつ、猫嫌いなおばあちゃんと、猫好きな主人公麻緒と姉真由、両親との楽しい一家の様子が良く伝わってくる作品。ありふれた日常生活が見えるように素直に書かれ、低学年の子供達にも理解しやすいと思われる。

「ライオン日記」

田中 廣司（岐阜県）

＜受賞理由＞

学校飼育動物のウサギの飼育を通じ、命の大切さを学んでゆく児童達を描き、読み手に考えさせる作品。「小さな弱い動物を大切にできない者が、どうして友達を大切にすることができるの？学年が一つ上がると、一つ強くなれる。そして同時に一つやさしくもなれる。強くなりたいから、弱い動物にやさしくなる。」心に響く言葉である。